〔骨董集上編中〕宗祇の蚊帳

今俗に見えをいふといふたぐひ、虚言して自誇事を、百七八十年前の諺に、宗祇の蚊帳といひたるよし、宗祇法師とおなじ、蚊帳に寐たりと、虚言して誇し者ありしより、の諺になりしとなん

〔世鏡抄〕八十氏人振舞之事

筆ハ師、紙ハ弟子、筆ノマヽニ何事モ書ヨシ、皺テ悪キ紙ニ字ヲ書バ、筆ノ損スルガ如クニ、師モロトモニ人ノ口ニ漏テ、師弟地獄ニ落ツ、

〔駿臺雜話四〕燈臺もと暗し　しばらくありて燭もて至りぬるに、翁ふとおもひよりしまゝ、燭臺をさして、世俗の諺に、燈臺もと暗しといふは、いかやうの事にたとへていふにやあらんをのをのいふて見給へとあれば、座客の中ひとりいひけるは、世に何事にてもあれ、外にはかくれなき事を、其もとにてきけば、却て分明ならぬやうの事にかく申ならし候、〇略中翁きゝてすべて比喩の語は、義理のとりやうにて、色々に申さるゝ物にて候、此諺も各たがひに其義をつくされしにて、もはや此外はあるまじく覺え侍る、但各の申さるゝは、いづれも燈臺もと暗しを、あしきかたにたとへらるゝにて候、翁は又此諺をよろしき方に取なしてきゝ、度こそ侍れ、又一種の道理もあるべきにや、韓退之が短檠の歌に、長檠八尺空自長、短檠二尺便且光と作れるごとく、燭臺も長きは燭のもとくらく、短きは燭のもとあかるし、〇略中しかればもとをあかるくしては、遠きをてらし難し、遠きをてらすは、必もとくらきものとしるべし、〇略中此諺を考ふるに、燭臺はながくしてもとのくらきにて、其明おのづから遠きにおよぶ、君子の道は闇然として日にあきらかなるがごとし、もし短うしてもとあかるければ、其明わづかに近うしてやみぬ、〇略下

〔瓦礫雜考下〕ちやうちんにつりがねといふ諺

さて此諺は、ちやうちん出來てよりの後のことなれば、宗鑑法師が新撰犬筑波集に、片荷かるく